

大学における e ポートフォリオの有効活用に関する検討

早坂 成人[†] 石坂 徹[†] 石田 純一[†] 刀川 眞[†]

室蘭工業大学 情報メディア教育センター[†]

1. はじめに

近年、高等教育においては教育の質向上や質保証の必要性から、eポートフォリオが注目されている。そして多数の大学で利用され、その活用事例も報告されている。しかし、その多くが学科や専攻などに限定された利用や、特定分野の用途活用に留まっており[1][2]、学科や学部を超えた大学全体での利用や大学を超えた活用は、十分に行われていない。しかし実際の学生の学習行動や様々な活動は、学科や学部内だけで実施されているわけではない。さらに大学は国内外の大学等と連携して、教育や研究活動が推進されている。そのため学生の活動範囲に合わせてeポートフォリオの運用も、これまでの学科などの枠組みを超えた利用範囲の拡大が必要となっている。そこでeポートフォリオの全学展開や他大学との連携を目指し、学科内に留まらない学内利用、また他大学間を跨ぐ利用、編入学生などの単位認定に関連する活用方法を提案する。

2. 教員共有 e ポートフォリオ

e ポートフォリオと呼ばれているシステムの形態やソフトは、導入している高等教育機関ごとに用途や目的が異なっているため、さまざまと言われている。例えば文献[3]では、主な e ポートフォリオの活用目的の分類として6つを挙げている。その分類を表1に示す。それぞれの e ポートフォリオは目的が異なっているため、蓄積や管理される成果物に違いはあるものの、取り組みのプロセスや気づいた点を記録して見える化し、学習の振り返りを誘発するものである。それら記録された情報の閲覧者や入力者は、一般的に学習者か教員となる。大学での e ポートフォリオの利用単位は、学科単位での運用が一般的となるため、教員間で共有される学生情報は、学科内に限定されることになる。教員共有 e ポートフォリオは、学科内の教員だけで共有し

ている学生情報を学科外の教員と共有し、共有範囲を拡大して有効活用を目指すものである。

さらに各大学で利用している e ポートフォリオは、同様目的で利用しているシステムであっても、学生に記録させたり、教員が登録している情報は同じとは限らない。このため情報の統一化は難しいと思われるが、共有する情報はレポートなどの授業の成果物、その取り組みのプロセス、その他気づいた内容などを記録した情報である。以下、共有する情報を「記録情報」とする。

表1 主なポートフォリオの活用目的

名称	主な用途
assessment	スタンダードや期待、成果、目的との関係により、その達成具合を評価するためのもの
presentation	専門性の育成や個人的な学習成果や達成について表明するもの
learning	学習プロセスにおいて、学習者が文書化したり、学習を振り返ったり、学習を誘導するためのもの
personal development	専門性の育成や自己成長、就職活動に関連するもの
multiple owner	複数の所有者によって共有するためのもの
working	個人による学習と成長に関する複数のタイプを組み合わせたもの

※ 名称のそれぞれ語尾にportfolioが付く

3. 教員共有 e ポートフォリオの適用例

教員共有 e ポートフォリオの適用例を次に示す。(図1参照)

(1) 教育課程間共有

大学の教育課程は大きく分けると専門学科による教育課程(以下、「専門課程」とする)と教養教育を中心とした教育課程(以下、「教養課程」とする)の2つとなる。大学でのカリキュラムは低学年で教養課程の科目を多く学び、学年が進むほどに専門課程の科目へ移行することになる。このため、進級時は教養課程から専門課程へ学生を引き継ぐことに等しくなる。

教養課程の科目は専門課程に比べて、科目間の接続性が弱い傾向にあるものの、外国語科目や情報科目では、ドイツ語1と2や情報リテラシー1と2など、接続性の強い科目もある。このため科目間や教養課程内の記録情報の共有は

Study of Effective Utilization of e-Portfolio in College.

[†]Narihito Hayasaka, Tohru Ishizaka, Jun-ichi Ishida, and Makoto Tachikawa
Center for Multimedia Aided Education, Muroran Institute of Technology

有効であると思われる。さらに専門課程の教員と記録情報を共有して学生情報の引き継ぎを行う。教員はこれまで目にすることの無かった新たな科目情報から、学生の詳しい情報を得たうえで、教授することが可能となる。また学生は教養課程を含め入学時からの継続的に蓄積された記録情報から学びを振り返ることが可能となる。

(2) 学科と他大学科目間共有

大学間における連携の一つとして、他大学との単位互換協定がある。例えば本学では単位互換科目を設定しており、他の大学等に出向くことで本学所属のまま、講義を履修することができる。履修を希望する学生のこれまでの記録情報や現在の能力を他大学の講義担当教員に提供する。これらの情報を共有することで、履修を受け入れる教員は自校学生と同程度の学習経験があるか確認しながら、最適な指導への活用が期待できる。

(3) 大学間学習体系共有

例えば、本学での編入学生の単位認定作業は、予め学科等で設定した認定ポリシーに従って、科目担当者が出身校のシラバスを閲覧して実施している。シラバスの内容によっては、具体的な授業内容が示されておらず判断に苦慮する場合がある。出身校での学習履歴として e ポートフォリオ内の学習プロセスや課題・レポートを参照できれば、より具体的な学びの内容や学習経歴の確認が可能となる。また学部卒業後、他大学の大学院進学時にも入試成績以外の情報として有効に活用することもできる。

4. 考察

前節の適用例では、初めに専門課程と教養課程の情報共有について述べた。しかし学内での科目履修は、例えば図 1 の点線の結びのように入他学科の科目を履修する場合もある。このときは専門課程間となるため教養課程に比べ、学科や学部固有の運用ポリシーが障壁となることも考えられる。このため学内での情報共有を実現する場合には、学科間、学部間など、さらに広域な共有も視野に入れた検討が必要となる。

次に他大学教員との情報共有では、それぞれの大学で習慣に違いがあったり、利用環境やシステムが異なると思われる。またどの大学でも編入学生の単位認定が行われているので、認定のための作業が短時間でできるように、シラバスの標準化や認証資料の整備が必要である。

また学内外において、記録情報を共有するためには、個人情報への漏えいに対する十分な対策が必要となる。e ポートフォリオシステムの情報セキュリティの対策はもちろんのこと、システムを利用する教員への十分な教育と啓発活動が必要となる。

5. おわりに

情報を共有することは、担当する科目の記録情報をすべて他の教員に公開することになる。このため FD (Faculty Development) への意識の高まりから、授業内容の見直しや教授方法の工夫など、教育改善効果も期待ができる。

大学の規模は、多数の学部を持つ総合大学から、本学のような単科大学までさまざまである。特に大学の規模が大きくなるほど、学内の共有だけでも難しいことが推測できる。また e ポートフォリオは、小規模の大学でも適切に活用できていないことが指摘されているため^[3]、共有の準備を兼ねて利用内容の見直しが必要か検討すべきである。

参考文献

[1] 進目真紀, キャリア教育における e ポートフォリオの活用方法に関する考察, 情報処理学会研究報告, Vol. 2013-CE-120, No. 3.
 [2] 青木幸子, ICT を活用した教員養成教育に関する研究—教職 e ポートフォリオに関する第一次調査の結果より—, 東京家政大学博物館起用, 第 18 集, p39-55, 2013.
 [3] 小川賀代, ”大学力を高める e ポートフォリオ—エビデンスに基づく教育の質保証をめざして—”, 東京電機大学出版局, 2012.

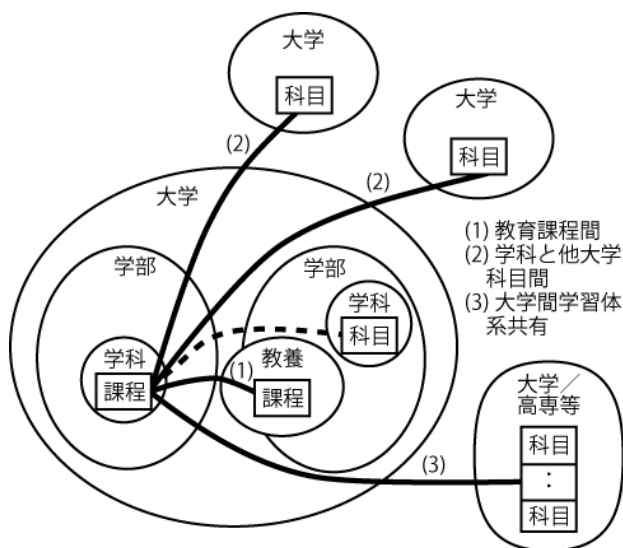


図 1 記録情報等の共有概略図